

研究授業や研究協議会等を見直すと、子供の存在を強く意識するようになる。どの学校でも行われている子供抜きの教師だけの授業のシュミレーション、教師だけで話し合う研究協議会等は、このままでよいだろうか。これまで当たり前と思われた授業研究や研究協議会を見直す。

■ 教師だけで行う研究協議会の問題点

多くの教師が研究授業を教材開発・授業展開・指導目標と評価の作成等を経て行うものにとらえてきた。授業者が考えた内容を同僚と吟味し、模擬授業等を経て本番の授業を行う。その後、研究協議会を済ませて終了という構図だ。こうした過程の中にある研究授業は、果たして有効であっただろうか。また、従来の研究協議会は、授業者を誉め合うことで終わることが多かった。発言者が偏り、若手教師が発言できないこともあった。課題について意見が出されても論点を絞りきれず、改善策を見出せないまま終わることもあった。私自身、そうしたことの改善のためにワークショップ型の研究協議会を取り入れた。だが、授業の質の大転換までには至らなかった。それは、子供抜きの教師の論理だけで研究授業や研究協議会を進める学校常識があったからだ。

学習指導要領の趣旨である子供の主体的な学びは、教師だけの研究授業や研究協議会だけでは達成できない。学習指導要領が変われば、当然、授業運営や指導方法の改善も変えなくてはならない。

■ 子供版の研究協議会

素晴らしい授業を行う教師には、共通なことがある。授業づくりに子供たちを参加させていることだ。ある授業で「先生が話す授業より、みんなで話し合う授業が楽しい。」と発言をした子供がいた。子供が一人の授業運営者として意識をした言葉だ。こうした子供の言葉の出る授業を創るには、何を大切にすればよいだろう。前述した教師の例が参考になる。それは、教師だけで授業を創るのではなく子供参加型の授業だ。

子供参加型の授業を行うためには、子供たちに授業に責任を持たせるとよい。教師は、授業の中で子供に任せる所は任せる。子供たちは教師を頼るのではなく、仲間で学び合いながら課題を解決していく授業だ。

研究協議会も教師だけで話し合うのではなく、子供自身が授業反省会を行う形も考えられる。全国では、すでにこのことを実践している学校がある。熊本県や高知県津野町では、授業後に授業評価という形で子供同士が協議するようになった。子供版の研究協議会だ。子供たちが自ら授業を振り返るのですぐに次の学習へその反省を活かすことが出来る。その具体的な取り組み方法をご紹介します。

ある学校では、子供たちが「成果・課題・改善策」を評価項目にして話し合う。

また、「アウトプットが出来たか、教え教えられる活動があったか、振り返りの記述が出来たか」で話し合う。

子供たちが自分自身や学級全体で授業を振り返るので、改善策をすぐに実行することが出来る。教師は、子供たちの授業反省会を参観するため、主体的に学ぶ子供の姿を間近に見ることが出来る。教師と子供が協働して授業を創り、それぞれが反省会を行う。私はこれば当たり前のことと思っている。なお、子供たちが授業反省会を行うので、教師だけの研究協議会は短時間で終えている。話し合った内容は、次の日には研究授業を行った学級の子供たちに公開をしている。その内容は次の通りだ。

ある学校では、子供向けに全教師がホワイトボードに授業の改善点をメッセージとして書く。

ある学校では、従来の教師だけで話し合った内容をホワイトボードに記入し公開をする。

こうしたことが当たり前と思う教師が増えてきたのも一つの成果だ。

多くの学校では、まだまだ教師だけの研究協議会を行っている。これでは、教師同士で話し合った内容が子供には見えない。そこで、ご紹介したとおり、教師の考えた改善策等の付箋等を授業学級の子供に届けるとよい。次の朝、教師が話し合ったことを子供に公開すれば、こぞって読むだろう。それが子供たちを励ますことにも繋がる。教師が子供たちの授業反省会を観る。子供たちは教師の研究協議会の内容を文字で知る。双方向的な関係が出来れば、授業改善はかなり図られると思う。学習指導要領に記載された「自主的」



「自発的」の文言を大事にするならば、教師だけの研究授業や研究協議会を見直す時期ではないだろうか。